



南から見た金峰山

市史編さんだより

自然専門部会 渡辺一徳

西山とも呼ばれて市民に親しまれている金峰火山は、熊本市の西部にある二重式火山である。その中心的存在

である金峰山は、二ノ岳・三ノ岳をはじめとする外輪山に閉まれたカルデラ内にできた溶岩ドームである。

昨年來、雲仙火山の主峰普賢岳が一九八六年ぶりに噴火し、活動を続けている。噴火は普賢岳の山頂部付近で起

こり、六月三日の火碎流は多数の犠牲者を出す大惨事を引き起こした。普賢岳の噴火が始まつてからは、約二百年前のいわゆる「島原大変肥後迷惑」のこともあり、とくに眉山の崩壊と津波が心配されてきた、津波を引き起こした二百年前の眉山の崩壊は、普賢岳の一連の噴火活動の終盤に起つたことであり、県・市民の関心は極めて高い。対岸の普賢岳の噴火が続き、これだけの被害が出来ば、熊本市民としてはお膝元の金峰山が噴火しないのか気になるところである。まして、金峰山が普賢岳と同じ火山帯に属することを知ればよいよ心配になるだろう。以下この問題に関して若干の私見を述べてみたい。

金峰山が火山であることが明らかにされたのは、およそ百年前の一八八九年に起きた熊本地震の前年のことである。熊本地震のときにも金峰山が爆発したのではないと騒がれた。そのため地震の直後には、学者によつて金峰山の調査が行われたが、ガスの噴出や噴火などの火山活動を示す特別の異常は認められなかつた。熊本地震は、熊本市清水町付近から小島上町の御坊山付近にのびる立田山断層が動いたことに伴う地震であることが、最近の筆者らの研究では明確になつてゐる。

さて、中部九州には、別府と島原半島を結ぶ方向に並ぶ主な火山として、東から順に由布・鶴見岳火山、九重

行發集・編
熊本市
新熊本市史編纂
委員会

熊本市手取本町 1 の 1
市史編纂事務局
☎328-2038

目次

▽金峰山は噴火するか………	1
▽六箇庄について………	2
▽新聞広告の存在意義………	3
▽新発見の熊本城下町絵図について………	6
▽日誌抄………	7
▽史料調査にご協力いただいた方々………	8
▽編集後記………	8
▽新聞広告（一）………	8
▽熊本の花街（一）………	8

火山、阿蘇火山、金峰火山、雲仙火山がある。このうち阿蘇火山を除けば、いずれも厚い溶岩流や溶岩ドームで特徴づけられる火山で同一の火山帯に属すると考えられている。火山帯とはある限られた時代内に噴出した火山が分布する地帯をいい、同一の火山帯に属する個々の火山のマグマが地下で連続していることを意味しているわけではない。マグマはそれぞれの火山の地下で独立に生じて上昇してくると考えられている。したがつて、普賢岳が噴火したから、金峰山が噴火すると考へるのは短絡的である。しかし、普賢岳と時を同じくして大噴火を起こしたフィリピンのピナツボ火山と、日本の火山の活動を結び付けて考へる人がいることも、新聞・テレビなどでご存じのことであろう。その根拠は、三宅島、伊豆大島、伊東沖、普賢岳など最近噴火した火山や地震がいわゆるフイリピン海プレートの周辺に集中しているように見えるため、同一プレートの周辺に蓄積した歪が解消されているのではないかという考え方によつてゐるのである。

ところで、日本には現在は活動していない火山を含め八十三の活火山が数えられている。活火山とは、およ

そ二千年前までに噴火した証拠がある火山とされている。二千年というものは有史時代に活動したと見なせるおよそ数百年との考えによる。実際には火山の一生は一般に数万年～数十万年と非常に長い。それらの火山は、数十年～数百年間の休止期を挟んで噴火を繰り返すのが普通で、数千年の休止期を挟んで噴火することもある。したがって、現在は活火山ではない火山が、今後活動することもあり得るのである。

金峰火山の形成時期については、いろいろの意見があり、誕生の時期ははつきりしないものの、年代測定の結果から、およそ百万年前までに外輪部が出来上り、およそ十五万年前に中央の金峰山ができると考えられる。

金峰山は、噴火記録は全くなく、活火山としてはリストアップされていない。十五万年前の溶岩ドームが形成されて以降噴火が起つた形跡も認められない。したがって、金峰火山は一応寿命を終えた火山のようにみえる。しかし、金峰火山の周辺では最近も地震が時々起きており、河内には温泉もある。これらの地震や温泉と金峰火山との関係は解つてはいないが、金峰山がすでに完全に死に絶えた火山であつて、今後火山活動が全く起こらないとは言い切れない。今回の普賢岳の噴火の際には他の火山の噴火の時と同様に地震などの前兆があつた。もし、金峰山が十五万年ぶりに目を覚ますならば、非常に大きなはつきりとした前兆があるに違いない。現在のことろ、活動を再開すると考えなければならないような兆候は認められてはいるが、さしあたつて噴火を心配する必要はないと考えるのが妥当であろう。

なお、金峰火山の地形・地質についてまとめたものとして次の文献がある。

横山勝三・渡辺一徳（一九九一）『熊本市および周辺地域の地形・地質の概要と研究課題』・市史研究「くまもと」、二号、五三・七二。

調査トピック

六箇庄について

中世専門部会 村上 豊喜

平安時代後期から全国的に展開する荘園制度は、当熊本域においても、多数の荘園を発生せしめている。例えば高等学校の教科書にも登場する鹿子木庄（清水・池田・花園・田北部町一帯）は現鹿子木町に地名を残し、鎌倉時代の詫麻郡は、「国内莊々名々坪付注文」（詫摩文書・以下、「名々坪付」と略す。）によれば、大きく西郷と東郷に別れ、そのうち西郷には、新庄である最勝光院領神蔵庄（田数七百十六町五反）、本庄である安富庄（田数五百十九町八反、これが本庄の地名の起源である）、それにいまも地名として残る八王子庄（田数三十八町）が成立していた。また、神蔵庄内には、「春武（春竹）」や、「与安（世安）」などの地名が知れる。東郷は健軍神社領（田数二百三十町五反）・国分寺領（田数五十余町）・六箇庄（田数三百四十町二反）からなっていた。これらの庄園のうち、今回は六箇庄について紹介したい。

六箇（ろつか）と言えば、すぐ思い出す地名としては上益城郡嘉島町の上・下の六嘉（ろつか）であろう。確かにこの嘉島町の六嘉が六箇庄の名残の地名であることは間違いないところであるが、中世の文書からその庄域を復元してみると、熊本市関係では小山・戸島・長嶺・鹿帰瀬・平山・嘉島町では上島・鰐・益城町では福富・安永・平田・木山・木崎・砥川・布加良（福原）・菊陽町では道明などの地名が、六箇庄内として散見できる。したがってこの莊園は、熊本市東部の白川以南の小山付近の丘陵部から、その南東部に広がる益城・嘉島の水田地帯を含むものであることが判明する。次にこの莊園は、

建久二年（一一九二）の「長講堂所領注文」（鎌倉遺文）に登場することから、長講堂領である。長講堂とは後白河上皇が院の御所（当時は六条西洞院）に設けた持仮堂に始まり、寿永元年（一一八三）から保元元年に創建された寺院である。その莊園は全国に一二八ヶ所あったと言われば、その一つがこの六箇庄であった。この長講堂の莊園はその成立事情からして、長講堂そのものの持つ力というよりは、院すなわち皇室の莊園としての側面が強く、事実これらの莊園は皇室の財産として伝えられと言われば、その一つがこの六箇庄であった。この長講



て行くのである。したがつて六箇庄の本家（莊園の最高所有者）は皇室である。ところで欠年であるが「久我家領目録」（久我文書）に同家の肥後國の莊園として「阿蘇社・加納・健軍社・砥川・木崎・安永・山本庄」とある。このうち砥川・木崎・安永は六箇庄内である。久我家は村上源氏の一族で、阿蘇社領の領家（莊園の中間所有者）となつたのが、永暦二年（一〇七八）とされ、また健軍社が阿蘇末社となつたのが治承四年（一一八〇）ころと言われている。したがつて砥川以下の地が久我家の所領（領家職）となつたのも、恐らくこの前後であろう。この外の六箇庄の土地の領家は判明しない。そうして長講堂創建時に久我家からこれらの地が後白河上皇に寄進されたのである。ただし、これが即、「名々坪付注文」の田数三百四十二町余の六箇庄と同一とは考えられない。

工藤敬一氏の神藏庄に関する研究（神藏庄成立以前に、詫摩郡全体を領域とする皇室の莊園があり、それが健軍社領の片寄せ（一定の地域に莊園をまとめる事）を契機に、詫摩本庄イコール安富庄、新庄イコール神藏庄が成立する。）を考えると、「名々坪付注文」に載る六箇庄も再編成された後の姿と考えられる。従つてこの莊園の成立過程については、その莊域比定も含めて、もう一度研究してみる必要がある。今後の市史研究の課題の一つである。

さて、鎌倉時代も終わりに近い正和五年（一一一六）当庄小山郷地頭早岐清基と当庄惣追捕使職給主水原係四郎との間で争論が起きている（詫摩文書）。それによると、当庄の地頭は各村・郷ごとに設定され、しかも本補新補の別があつたことがわかる。本補とは永久の乱以前から、新補は乱後に設置された地頭である。また、惣追捕職の権限は本補の支配する土地には及ぶが、新補の地には及ばないことが慣例となつていたこと、庄内の砥川・木崎・上安永・鯰郷が新補の地であることも判明する。二人の争点となつたのは、小山郷が新補の地であるかどうか。

である。当然地頭は新補と主張し、惣追捕職は本補と主張している。結局この論争は、北条氏得宗（執權北条氏の本流）に裁許を仰ぎ、今後は惣追捕使職は小山郷には関与しないことで、和解が成立している。ただこの史料で解明しなければならない問題はまだ多い。得宗に裁判されたもので、等々である。これらも市史での課題である。

「新発見の熊本城下町 絵図について」

近世専門部会 右山幸介

御奉行所日帳（永青文庫蔵）に、「熊本廻之絵図八枚直候而御やしき奉行衆より被差上候」や「熊本御曲輪内之絵図差上可申候間松下清兵衛被申通（中略）御屋敷方請込之所分絵図拾枚箱二入、松下清兵衛方へ手代ヲ添為持遣申候事」等の記載を始として、絵図に関する記録を散見するが、特に屋敷方の支配下にある御屋敷に関する絵図は、御侍の住居に関する事柄でもあり、その管理運営上重要な参考資料であつた。ただし、この絵図も、御侍の屋敷に関するのみを記載していたというわけで勿論ない。例えば、「石塘口より高橋川口迄之絵図」（御奉行所日帳・延宝六年）にいうところの絵図とは、主に坪井川を描いたものである。さらに、「長六橋今度落候。石垣茂損由ニ付 絵図之儀申參候處、調出候。絵図之通り候へハ、指而損候様子ニ相見不申候（後略）」（同・正徳二年）の例でも分かる通り、大水による長六橋の流失に際して石垣が損傷したので、その程度を見るのに絵図が利用されている事実である。つまり、絵図にはそれぞれ意図するところ（主題）があり、それに沿つて作成されるということである。永青文庫や県立図書館には、一躍注目をあびることになつた。この内一点は木版彩色による本妙寺鳥瞰図、残りの一点は若干書き込みに差があるが、いずれも町割り図が相次いで発見された。そこで、紹介して皆さんの参考に供したい。

○「出京町絵図」

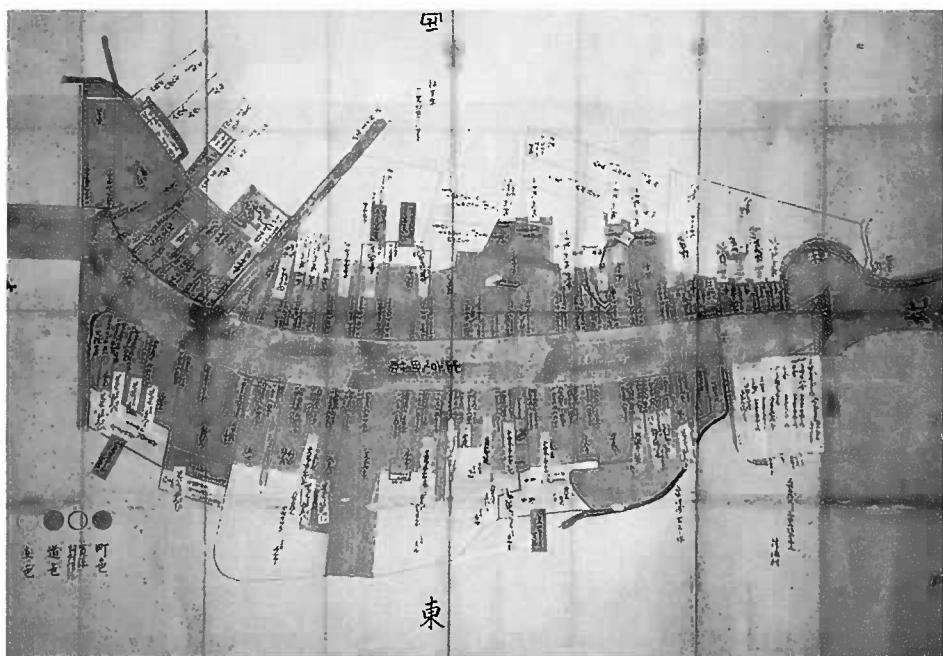
今年始め、熊本市在住の方より代々伝わる所蔵史料が、熊本市立図書館へ寄託された。この中に絵図が三点含まれ、一躍注目をあびることになつた。この内一点は木版彩色による本妙寺鳥瞰図、残りの一点は若干書き込みに差があるが、いずれも町域を表した「出京町絵図」である。淨書したと思われる絵図の方を例に取ると、現在の

池田一丁目と出町の田園道三号線沿いを描いている。南北一九二cm、東西一五四cmの大きさで、比較的厚手の和紙に手書、裏打ちがなされている。凡例では、一軒毎の家屋を黄色で彩色、これを町色とし、道を灰色、質添・相対借添を赤で明い、在を黒で示しているが、全体を塗り潰す彩色は施していない。中心の道筋は熊本城下と小倉を結ぶ豊前街道であり、街道中央には「出京町筋」と記してある。この街道に沿う形で一軒毎の間口・入り、竈主、軒帳の番号が記されている。町屋の周囲は、飽田郡五町手永津浦村と池田手永岩立村の在となる。空地が見え、特に北側の岩立村側火除空地内には井戸と番所があり、出入りを取り締まつた。東側町並み中央に観音堂が描かれている。

「出京町筋」と記すこの絵図は、現在の出京町一帯とは異なる。元々は京町本丁と接する「から掘り」より北側一帯を出京町と称していた。本絵図は、その地域よりさらに張り出している。そのため、この地域は「新出町」は本無之。池田手永岩立村之内にて正徳元年大本夕岸（舍人）え岩立村の中を屋敷に賜りにしに付、其村の百姓を出京町口より外に百五間限り作り出し町並となれり。初は村の支配にて出小屋に准じたりしを、天明中に議有りて熊本出京町の内加る（官職制度考）とあるように、「出京町口より外」であり、天明年間の新出町、あるいは明治初期には新出京町と呼ばれた地域に相当する。因みに前記では「天明中」とあるが、「（天明八）年新出町御町支配ニ相成リ地床ハ地子究メニテ御町方ニ納リ翌寛政元年正月十九日町在受取渡シ相スミ（後略）」（荒木家伝記）の示す通り、正確には天明八年に町方支配となり、熊本府中下に入った。

尚、絵図中に別当役をした明和七年生まれの荒木和三郎、和三郎の甥で寛政元年生まれの荒木市三郎の名前が見えるところにより、絵図の成立年代は寛政年間（文政年間）と推測される。

○「新町絵図」



出京町絵図（荒木正安氏所蔵）

五月に県立美術館で開催された「肥後絵図展」を契機として発見された。新町で松原屋という屋号の家に代々伝わるものであり、松原屋は武家定宿や諸国通荷物問屋を営んでいたという。後に書き込まれた箱書には「古代新町全國 口伝 清正公熊本新町戸別割渡図」とその来歴を記し、所蔵者の氏名とともに墨書きされている。東西が一九五cm、南北が一二四cmとほぼ出京町絵図に近い大きさである。長い年月で数カ所の虫喰いや、鮮やかであった色が剥落している点、さらに中央部分が大きく手擦れで墨が消えている点が惜しまれる。

さてこの新町は、古府中より移した吉町に対して、加藤清正が新しいプランのものと建設した町として知られる。細川時代の「高麗門・塩屋町絵図」（県立図書館蔵）と名づけられた新町絵図は数多いが、それはすべて藩士の屋敷を描いたもので、町人の住む地域はまとめて「町」として描かれている。ところが、本図では逆に藩士の屋敷は一括して「御家中」としており、町屋は一軒毎の間口、入りと竈主、又屋号があるところはそれを記している。

記載されている内容を町名から見てみると、南北の道筋に新堀町目、新式町目、新三町目、蔚山町、新桶屋町、上職人町、中職人町、下職人町、段山町、新馬借町、高麗門町とあり、東西の道筋には檜物屋町、新魚屋町、千葉町（明治五年前後の「白川県肥後國熊本全図」によると、同所は「チフツマチ」とあり、チカ千か不明）、八百屋町、新細工町、新鳥屋町、塩屋町、瓶屋町が見え、現在は町名変更で使用されなくなった名が幾



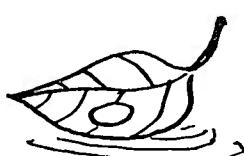
新町絵図（東坂祐次郎氏所蔵）

とも記されている。これらの町を新堺丁目（水色）、新武丁目（白色に近い）、新三丁目（柿色）、蔚山町（灰色）、職人町（白色）、新細工町（緑色）の六つの大きな懸に分け、塗り分けられているのが凡例で分かる（新堺丁目／新三丁目の「丁」を、町中の書き込みでは「町」、凡例では「丁」としている）。これによって、各町域が判然とする。建物では、新堺丁目御門、新三丁目御門、高麗門がリアルに描かれ、新堺丁目御門前の勢屯には井戸と四枚掛の高札場（実際は七枚掛であった）が、また番所は七ヶ所に記されている。この番所の中で、南北の道筋最北端（檜物屋町から二の勢屯にかけての道筋）に四カ所記されているが、「高麗門・塩屋町絵図」には見えておらず、本絵図ではじめて分かったことである。このことは、文献上見えていたが場所は不明であった「出小屋」が、新堺丁目御門脇の堀と接する場所と新三丁目御門の前二ヶ所にはつきり記されていることと併せて特筆すべきことであろう。又、東側に御客屋（現在の古城町に近い公園付近）、西に牢屋（現在の一小新小学校付近）、寺院では正教寺、正妙寺、長光寺、順徳寺、さらに天神（現在の富重写真館付近）や明治五年、天皇行幸の際の行在所跡の張り紙も見える。

屋号については町名と一致するもの、例えば檜物屋町に「ひものや 吉右衛門」、八百屋町に「八百や 門吉」、新桶屋町に「おけや 平三良」、新魚屋町に「魚や 新四良」、瓶屋町に「かめや 次郎右衛門」という名がみえるが、必ずしも同業者が集中しているという訳ではない。近世都市の成り立ちを考えた場合、町名によって同業者の集中という住み分けを判断しがちであ

るが、初期的には考えられても、本絵図を見る限りそれは当てはまらない。職業を示す町名であっても、当然その中には綿屋、かさや、針屋、香具屋、布屋、とうふや、餅屋、種屋、米屋等多種多様の職業を持つ人々が混住している。ただ、この点から本絵図で特に注意すべきは、西側の段山町、新馬借町、高麗門、新細工町には殆ど屋号が見られない人々が住んでいることである。新町の成立を考える場合、ないがしろに出来ない点といえよう。この他、屋号あるいは職名については、かこや（鶴籠屋）、かちや（鍛冶屋）、たはこや（煙草屋）、両替屋、塗師、材木や、愛宕山宿、疊や、大坂屋、甲佐や、兵庫や、肥前や、一文字屋、菊屋等様々見えている。

本絵図の制作時期を推測してみると、塩屋町に辛島儀助（町屋の絵図ながら、町屋の並びにある藩士の屋敷も抜かず）、幾つか見えている（新堺町目に西岡文平の家代の名があつたり、さらには「雑式草書」によると新三丁目御門に見えている出小屋が寛政三年に解除されているので、本絵図は宝暦一二年～寛政三年を示すものである。以上、これらの絵図二点によつて近世熊本の町屋の様相がかなり判明すると思われる。出京町や新町そのものは無論であるが、熊本では手つかずの流通史、社会経済史的立場からも貴重であるし、さらに広く熊本城下町の設計プランや城下町の拡大・発展という観点からも、新しい事実が判明する可能性を含んでいる。



新聞広告の存在意義

近代専門部会 中村青史

(一)に一頁の新聞広告がある。明治二十四年七月一日九州日日新聞第二六五六号の四面。とくに注目に値する二つの広告がある。一つは九州鉄道会社広告、もう一つは不知火館開業のそれである。

今年一九九一年より百年前、一八九一年(明治24)に高瀬熊本間の鉄道が開通し、門司から熊本まで線路が延びた。経済面は勿論、政治、軍事、教育諸方面への影響は大きく、本紙面にも大きく取り扱われているが、広告では実用面である時刻表及び賃金表が出ているのが特徴であろう。時刻表は、(下り)久留米発→午前六時三十分、午後二時三十六分、同六時三八分。大牟

田発→午前七時三九分、同一時四分、午後二時四三分、同七時四五分。高瀬発→午前八時二一分、正午一二時二三分、午後四時二五分、同八時二七分。熊本着→午前九時三三分、午後一時三四分、同五時三八分、同九時三八分。上り熊本発→午前五時四六分、同九時四八分、午後一時五〇分、同五時五二分。高瀬発→午前七時〇二分、同一時〇四分、午後三時〇六分、同七時〇八分。大牟田発→午前七時四六分、同一時四八分、午後三時五〇分、同七時五二分。久留米着→午前八時四六分、正午一二時四八分、午後四時五〇分、同八時五二分)となつており、賃金表は下等賃金表のみである。(熊本から、高級二三銭、大牟田三八銭、久留米六三銭、博多八九銭、門司一四七銭。池田から、高瀬二〇銭、大牟田三五銭、久留米六〇銭、博多八七銭、門司一五四銭。植木から、高瀬一二銭、大牟田二九銭、久留米五三銭、博多八一銭、門司一三七銭)。当時は本数も少なかつたので一番列車、

二番列車と言う呼び方もなされていた。このことは、文芸の世界でもよく使われ、とくに池田駅と小泉八雲作「停車場で」の虚構と事実問題とも関連してくる。なお、新聞ではあとでは欄外記事として時刻表は掲載されるのが普通となる。この広告頁でもすでに汽船出帆広告は、天気予報とともに欄外になっている。

次に不知火館開業広告は、「御宿開業広告——弊家今般新築完成に付来る七月一日より開業仕候間統々御来車御投宿之程伏て奉願候。熊本市手取本町元細流舍跡」とある。不知火館主は池部武。なお「但細流舍之儀は是迄の隣地に引移し不相換活版営業仕候」とある。不知火館は、月俸二〇〇円で第五高等学校に赴任して来た小泉八雲が、この年一一月一九日に熊本で最初に投宿した宿である。九州鉄道の熊本までの開通と軌を一にしての計画的開業であつたのだろうし、明治の熊本市の中心部に位置していて、早速八雲みたいな高級客を獲得したのであ

る。また、細流舍とは、紫浪新報社と同番地の同新聞の印刷所で、手取本町六一番地にあった。その他、目立つ広告としては、酒店と呉服店と時計店、薬店がある。酒店は日本酒で各売捌店名には現在なお続いている名前を見出すことができる。ここには出てないが、當時すでに熊本には洋酒や葡萄酒の販売店が出来ていた。新町一丁目の松本商店や、上通四丁目の田尻商店などの名が広告に見えている。呉服商店田代屋は、坪井町広丁にあって、洋服類も扱っていたことがその後の広告で知られる。そのほか、「工事請負入札広告」が第六師団監督部から出されているのも熊本に似つかわしい。しかもその文句も他と異っている。「……来る十六日午前九時迄に熊本陸軍経営部入札函へ投入すべし」と。業種別に広告を時代ごとに整理してみると、土地住民の生活史が浮かび上がってくるような気がする。



明治24年7月1日付九州日日新聞
(熊本日日新聞社提供)

熊本の花街（一）

民俗・文化財専門部会 鈴木喬

古く白拍子・遊君・妓女・遊女などと呼ばれていた女性は、各地の名所、門前町、交通の要地、港町などに集まっていたが、近世の都市の勃興とともにそれらの遊女達を抱えた遊女屋が繁華街の近くに密集した。豊臣秀吉が天正二七年（一六八九）五月に柳町遊廓を許したのが遊廓制度のはじまりであるともいが普通には庄司甚右衛門という人が風俗の矯正の立場から、慶長二七年（一六二二）に公認遊廓設置の請願を江戸町奉行に提出し、元和三年（一六一七）に許可された。江戸の吉原が起原であるとされている。幕府はその際「傾城町の外傾城商売すべからず」等五カ条の規則を定め、その他の私娼を厳罰に処するという布令を出した。しかし、勿論のことながらこれで私娼の群が絶たれることはなかった。

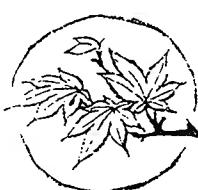
寛文年間（一六六一—七三）以降、江戸以外で公許された遊廓は京都の島原・山代の伏見柳町・近江の大津馬場町・大阪の瓢町・兵庫の磯町等があり、九州でも長崎の丸山・博多の柳町・肥前の樺島などに開設された。ところで肥後の遊廓のはじまりは川尻であった。しかもその公許の時期は宝暦三年（一七五三）八月で、かの「宝暦の改革」で名高い細川重賢公の時代であった。質素候約、文武両道の奨励、風俗矯正、奢侈禁止の時代に逆行するような遊廓が、城下から二里の距離にあるとは言いながらこの地に公許されたということは奇異にも感じられるが、やはり当時外来商人の出入する川尻においては、やむを得ね必要悪であったのである。場所は新田町と小路町の間で柳堀町と名づけられた。大抵の遊廓がそうであるように、ここもおそらく湿地か池沼を埋立てて造

成された土地と推察され、柳堀町の地名も遊廓が出来てから後に名付けられたと伝えている。この遊廓の存在については、新田町の西蓮寺（淨土真宗大谷派）に戦前まで、当時の遊女小夜浦ともう一人の遊女の墓のあつたことが確認されており、また同寺の『年代記』の中にも、親鸞上人の五百年忌に際して「柳堀の女郎寄進にてゴウのもり物に葉子にて松の作り物壺組にゴウ上り申候」との記事がある。親鸞五百年忌は、当寺で宝暦一〇年正月一九日から二六日にかけて執行されているので遊廓の存

続が確かめられる。当地唯一の遊廓のことでもあり、絃歌さんざめき嬌声絶えぬ別天地であつたのである。（明和九年・森本一瑞編）の河尻町筋の中の柳堀町の註に「此所近年戯場有リシカ、明和五・六年ヨリ止マル」とあり、また『川尻町御奉行代々記』（川尻町谷田家旧蔵）にも「明和六年、石守甚助一此時柳堀遊女町禁ズ」とあることで、公許後僅かに一五年程で廃止の裏き日を見るに至ったことがわかる。大正中期頃編纂の『川尻町郷土誌』には、出典は明らかでないが、「旧記録に明和五年（一七六八）八月九日、遊女残らず川尻を立退く。長崎のもの十人余り、肥後の者十人余りとあり。」と記している。江戸時代の公許の遊廓に関する記録はこれだけである。

柳堀町跡

一方私娼について調べてみると、これが文化年間（一八〇四—一八）のはじめ頃からしか判明しない。その頃城の三の丸の西側に当る段山一帯には私娼が群をなしていた。城内の大身の武家屋敷や新町・古町の商家にも近いため、知行取りの仲間、小者や町家の若者らの中には段山通いが普通のこととなっていた。このような私娼は本山や竹部にも棗喰っていたといい、熊本府中町筋のそここにある料理茶屋や飲み屋にも住み込みで、浮かれ男を誘う芸事半分の娼妓も多かった。藩ではこのような状況を肅正しようとして、無届けの料理茶屋に廢業や転業を命じているが、大した効果も上らぬままに幕末を迎えるに至ったのである。



3 . 3 . 10	3 . 8 . 19	3 . 16 . 19	1 . 15 . 21	1 . 23 . 21	1 . 24 . 24	3 . 20 . 25	3 . 20 . 25	3 . 20 . 25	3 . 18 . 18	3 . 17 . 15	3 . 17 . 14
10 . 9	8 . 19	16 . 19	15 . 21	23 . 21	24 . 24	20 . 25	20 . 25	28 . 28	20 . 20	17 . 17	17 . 14
現代史料調査（新聞史料）	近世史料調査（分類・筆写作業）	第六回原始・古代専門部会	第十六回専門部会（新編纂委員会提	第七回現地調査（絵図編纂検討）	第七回現地調査（新編纂委員会（新聞史料ランク付）の分冊について）	近代史料調査（新聞史料編収録史料採択、	近世史料調査（新聞史料編収録史料採択、	近代史料調査（託麻地区）	我孫子市）	近代史料調査（託麻地区）	編纂委員他都市調査（国学院大学・東京大
出案件について・絵図編纂合同部会の開催について）	近世史料調査（分類・筆写作業）	近世史料調査（古文書部会）	案件について）	史料編の内容構成検討）	各専門部会事業経過報告について）	絵図編纂部会（編集方針・レイアウト等について）	近世史料調査（新聞史料編収録史料採択、	近代部会史料調査（新聞史料記事採択）	近代史料調査（新聞史料記事採択）	学史料編纂所・国立民俗博物館）	学史料編纂所・国立民俗博物館）
第五回中世専門部会（史料編の構成）	近世史料調査（近世史料検索）	第十五回中世専門部会（史料編の構成）	第十六回専門部会（新編纂委員会提	第十回民俗・文化財専門部会（調査項目の調整・具体的な調査方法）	第十一回民俗・文化財専門部会（編纂委員他都市調査（国立国会図書館・品川区立品川歴史館）	第十七回中世専門部会（史料編の構成）	第十八回専門部会（新編纂委員会提	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回専門部会（第十九回専門部会）	近代史料調査（新編纂委員会提	近代史料調査（新編纂委員会提
中世城実調査（長嶺城）	第十六回近世専門部会（新編纂委員会提	近世史料調査（近世史料検索）	第十七回近世専門部会（新編纂委員会提	自然部会（動物関係調査打合せ）	第十一回民俗・文化財専門部会（編纂委員他都市調査（国立国会図書館・品川区立品川歴史館）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
中世文化財調査（清水町・京町台一帯）	第十七回近世専門部会（新編纂委員会提	近世史料調査（近世史料検索）	第十八回自然専門部会（新編纂委員会提	近世史料調査（新編纂委員会提	第十二回自然専門部会（第十二回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
現代部会調査（新編纂委員会提）	第十八回自然専門部会（新編纂委員会提	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十三回自然専門部会（第十三回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
第九回専門部会（藤崎八幡宮）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
中世史料調査（藤崎八幡宮）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
現代部会調査（沖縄県読谷村嘱託上原恵影）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
中世文化財調査（金石文調査打ち合せ）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
近世部会絵図調査（県立図書館）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
中世史料調査（藤崎八幡宮文書マイクロ撮影）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
中世文化財予備調査（黒髪・立田町一帯）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
近世史料調査（近世史料検索）	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提
原始・古代部会担当（神園山瓦窯址）発掘	第十九回自然専門部会（新編纂委員会提）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	近世史料調査（新編纂委員会提）	第十四回自然専門部会（第十四回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	第十九回自然専門部会（第十九回専門部会）	学史料調査（新編纂委員会提	学史料調査（新編纂委員会提

調査報告書印刷納入

第八回新熊本市史編纂委員会（旧年度事業報告・本年度事業計画について）

熊本区・飽託・託麻・上益城郡の一部郡村

誌筆写業務完了（絵地図）

現代史料調査（絵地図）

史料調査にご協力いただいた方々

自平成三年一月至平成三年六月

木村秀雄（田迎町田迎）、久野豊（上高橋町）、高野和人（大江五丁目）、坂口祐次郎（清水町麻生田）、荒木正安（龍田町陳内）、古閑孝（蓮台寺町）、（財）永青文庫、奈良国立文化財研究所、熊本大学附属図書館、新聞博物館、熊本県立図書館、市立図書館、熊本博物館、本妙寺、川尻小学校（敬称略）

市史編さん事業も発刊を来年度に控え、初発行の担当専門員の先生方は、原稿執筆の段階となつておられます。そのほかの、専門員の先生方も、史・資料の調査・研究・分析に寸暇を惜しんで取り組まれております。新熊本市史編纂委員会専門部会参与の乙益重隆氏（国学院大学名譽教授）が、去る三月二日逝去されました。乙益先生は、専門の考古学をはじめ、歴史学、民俗学と多方面にわたるご活躍でした。「郷土・熊本の考古学者として、また日本を代表する考古学者として著名でありました。先生の御業績は、「新熊本市史編纂」や今後の郷土研究における貴重な遺産となりました。謹んで御冥福をお祈り致します。

（敬称略）

編集後記

市史編さん事業も発刊を来年度に控え、初発行の担当専門員の先生方は、原稿執筆の段階となつておられます。そのほかの、専門員の先生方も、史・資料の調査・研究・分析に寸暇を惜しんで取り組まれております。新熊本市史編纂委員会専門部会参与の乙益重隆氏（国学院大学名譽教授）が、去る三月二日逝去されました。乙益先生は、専門の考古学をはじめ、歴史学、民俗学と多方面にわたるご活躍でした。「郷土・熊本の考古学者として、また日本を代表する考古学者として著名でありました。先生の御業績は、「新熊本市史編纂」や今後の郷土研究における貴重な遺産となりました。謹んで御冥福をお祈り致します。

（敬称略）

民の心の片隅みに懸念のある「金峰山は噴火するかについて」原稿をお願いしました。そのほか、奇しくも新発見された熊本城下町絵図については、通常の原稿の倍の字数を割り振りました。筆者の御苦労を多と致します。これからも、市史編さん事業で、史実に調査・研究・分析を加え「新発見熊本」を掘り起し、市民の皆様に報告したいものです。（事務局）